

## 仏像出現

「お聖人さま、手前は、伊東の地頭八郎左衛門尉の家来で綾部正清と申しますが、お願いの義があつて参上いたしました」

岩窟の聖人の前に、ていちように手をつくのであつた。今まで岩窟の周囲は、がやがやという人声で賑やかであつたが、それも静まつた。川奈の念仏講中の人びとが、聖人に危害を加えようとして、すでに行動に移らんばかりであつたが、この時駆つけた弥三郎の捨身の勢いと、続いて現われた地頭の家臣綾部正清の制止によつてことなきを得たのであつた。

なにごともしなかつたような顔をして、弘長元年六月十二日の月が天空に輝き、ここ川奈の浜には静かな波の音がきこえていたのである。

魚灯一つの岩窟の中に、聖人と弟子の日興が仏像のごとく動かない。正清の言葉は続く。

「主人は不思議なことに、お聖人さまがこの川奈にまいりました去月の十二日より発病いたしましたのでございます。百方医療に手をつくしましたが、一向にそのしるしもなく、祈禱師もたのんで

あらゆる秘術をつくしましたが、それも露ほどのしるしがございません。いまは主人とは申せ骨皮すじの餓鬼のごときあさましいいたらくでございます。占師をたのんで占わせましたところ、不思議なことを申すのでございます。これは仏さまのたたりであると申すのでございます。不思議なことがあればあるものだと思いますが、手前の主人はもはや言葉も通じない程の重病でございますので一向に要領を得ないでございました。ところがこの占師の噂が屋敷中に伝わりますと、ものおぼえのよい下人かおりましてこんなことを申しました。大分前のことでありますが、伊東の浜の沖に毎夜々々光りものがあつて、人が騒いだことがございました。なんだろうなんでしょうと浜辺で騒いでおるばかりで、誰も正体を見とどけようとは一向にしなかつたのでございます。

ところが勇氣のある漁師がおりまして、毎夜の光り物をこわがつて船を出さぬとは、浜の名折れであると、ある夜船を出して網を投じましたところが、仏像が上つたのでございます。仏像では漁師も料理のしようがございませんので、もてあましておりましたが、地頭様にとどけたら、ご褒美でも出るかと思つて漁師はその仏像を地頭様に届けたのでございます。地頭様はおつて沙汰をいたすぞと、たった一言おっしゃつたそうでございしますが、それなりで日がたつてしまつたのでございします。

その仏像ではなかるうかとの下人の進言でございました。毎夜海中より光りを発するというよ

うな靈仏ならば、拝まないでほっておけば、たたりぐらいは十分ある。さあ大変だ。その仏さまを拝めば治る。おがめおがめと家中が騒ぎたてましたが、こんどは一向にその仏さまのありかがわからないのでございます。たにしろ当の御主人がご重態で口もきけない。紙に書いてきいてみましても首をふるどころではございません。せめてうわ言でもいってくれまいかと思つても、なんにもいってくれないのでございます。暗夜の海底にあつて光りを発するぐらいだから、暗くしたら仏像が光りだすだろうと、屋敷中に灯りを厳禁しました。昼間も戸締めにしたしておりますが、今度は仏像が一向に光ってくれません。夜も昼も真暗な屋敷の中に病人の呻り声だけが聞こえるという。無気味さでございます。どうぞお聖人さま、御慈悲でございます。お助けをいただきますとう存じます」

綾部正清という家臣は、平身低頭して願うのであつた。

「これはこれは伊東の地から、わざわざ日蓮の名をきいて祈禱を頼みにまいられたか。現前に病人をみて、この日蓮はあわれと思わぬとは申さぬが、地頭が信を法華経にとうぜねば、どうして、法華経へ御訴訟ができればか、感応道交を願うことは叶うまいがながなものじゃ」

「お願いとはそこでございます。何分にも、地頭様が言葉を発せぬのでございますから、そこまでは申し上げられません、本復いたせば、ご内室を始め家人、下人にいたるまで、念仏をすてて南無妙法蓮華経と唱えるつもりでございます。いやいや玖須美の屋敷まで、お聖人さまがおい

でございましただけで、伊東八郎左衛門尉のご内室を始め家来下人一同は、病人の主人に代わりまして南無妙法蓮華經と唱え奉つるものでございます。どうか、この真情をお汲みとりくださいまして、只今でも、この岩窟を出て、どうか伊東の地へおこしを願うものでございます……」

聖人は静かに答えられました。

「これ日興つ、伊東へまいろう。支度をしなさい……」

「お聖人さま、家人が家探しいたしても一向に分らなかつたのは、あれなる仏像でございます。只今はあのような床の開に安置しておきましたが、まことにおそろしいことでございました。もしお聖人さまの御祈念をいただかねば、この朝高は今頃は地獄の何丁目かを歩いておるところでございます」

聖人の祈禱によつて、今はすっかり病のいえた伊東八郎左衛門尉は、四、五十日振りで声を出して笑うのであった。上座にすえられた聖人の顔には慈愛がみちあふれていた。

「左衛門尉殿、御本復まことにおめでとうござる。貴公はいよいよ信心を励まねばなりませんぞ。法華經の第七の巻には、この經は、これえんぶだいの人の病の良薬なりとありますれば、この法華經に信心をいたせば本復いたすは、仏の金言であつて、少しも日蓮の私意ではありません。そもそも病になる因縁を明かそうなれば六つあります。一つには四大即ち身体が不順なるが

故に病む。二には飲食の節度を失うが故に病む。三には心常に動揺するが故に病む。四には悪鬼便りを得るが故に、五には魔の所為、六には業の起るが故に病むとあります。しかしながら、貴公は病を得たが故にこの日蓮に逢うことができた。病ある人、仏になるべしとはこのことです。病によって道心はおおると申しますが、御貴殿の現在がこれです。こう考えれば、病も嬉しいでしょう。」

「いやいやお聖人、朝高今度ばかりは苦しみました。もうこりごりです。これからはお聖人の言葉通りに信心を励むつもりでございます。ついては、あれなる仏像でございますが、海中より出現したは不思議な仏像でございます。お聖人さまのような御高德なお方に御所持を願います存じます」

「左衛門尉殿、貴公はあれなる仏像をなんと思われておりますか」

「なんと申すと申しますと、つまり、みられる通りの仏像でございますが、やはり阿弥陀さまでございますか……」

「とんでもない。あの仏像は釈迦牟尼如来の尊像、釈迦仏の像でありますぞ。今、日本国中の寺々の釈迦仏の像は指をきられて阿弥陀の仏像にされ、日本国中に称名念仏の声があふれて、仏像といえは阿弥陀の像ばかりと申してもさしつかえがありません。御貴殿がこられない以前に、先程この部屋に入ると同時に、日蓮は思わず合掌礼拝いたしましたのです。何故ならば、日蓮はこの伊

豆の伊東に法華經の故に流罪に処せられたのであります。

釈尊は末法において法華經を説くならば、必ず刀杖瓦石の難、しばしばところをおわれる難等に逢うべしといわれておりますが、今の日蓮はモの法華經を説いたが故にここ伊豆の伊東に流罪にされました。それなのに、その伊豆伊東において、海中より出現の釈迦仏におめみえするとは、ただ感激のほかはありません。日蓮が法華經の行者なることを証明せられて、釈迦仏海中より出現し、貴公の病悩を縁として、ここに現われた尊い仏像と存じます。もし日蓮にこれを賜うならば、生涯身よりはなさぬ隨身仏といたしましょう」

「それ程までにお喜び下さるとは、朝高は思ってもおりませんでした。お言葉をうかがって大変に嬉しく思います。どうぞ……」

朝高は床の間に進んで仏像をいただく、聖人のお手に渡そうとした。聖人は法衣の袖に仏像をうけると、

「朝高殿、一心欲見仏、不自惜身命と法華經の自我偈にあります。仏を見る一心をみれば仏であります。法華經以外の經文にては心のすむことは月のようであるとか、心のきよいことは花のようであるとか申しますが、法華經ではそのように申しません。月こそ心よ、花こそ心よと申す法門が法華經の法門です。法華經以外の經々は世法をもって仏法をみておりますが、法華經にては、世間の法が仏法の全体と釈せられて、世法即仏法、仏法即世法となっております。一念三千

の法門よりすれば、凡夫即仏なり、仏即凡夫であります。末法に入れば法華經を持つ男女の姿、即仏の姿であります。この大法門こそ、釈尊が末法に入って病い重きわれわれに特に残された大良薬なのであります。末法において法華經の故にこの伊豆の伊東に配流の身となり、今その釈尊の尊仏を、わが法衣の袖におしいただかんとは、日蓮ただ今生の思い出これにすぎるものはありません……」

